
果てのない夢

春ノ風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

果てのない夢

【Nコード】

N0133I

【作者名】

春ノ風

【あらすじ】

間桐桜を餌にセイバー達をおびき寄せるキャスター。全てが思惑通りに事が運んだ。これでセイバーがキャスターの手中に収めることができ、聖杯戦争の勝利を得ることが出来る。そうすれば、長い間望んだ夢がようやく叶う……………はずだった。

(前書き)

はい、春ノ風です。今回はF a t e／s t a y n i g h tの一部
分を書かせてもらいました。少し残酷だし、バッドエンドなのでそ
ういうのが駄目な方は見ないほうがいいと思います。

「―――!!」

突如として乱入してきた五本の赤い光を纏った剣と槍の武器達。否、それは武器なんて生易しいものではない。一つ一つに秘められた魔力が桁違い。この無造作に放てられたもの全てが紛れもない宝具なのだ。

敵対していた者同士もさすがにこのような第三者の乱入は予期していなかったのか争いを一時休戦しその第三者を凝視した。特にこの地を陣取っていたキャスターは驚きと困惑に一瞬体が硬直した。そのため、第三者が行なった二撃目の攻撃に反応が一瞬遅れた。人間同士の格闘技でもその一瞬は致命的。サーヴァント同士の戦いといくればそれは即死につながる。

「……………え？」

それでもキャスターが予想した痛みは襲ってこない。ただ目に映るものは自分ではない者の飛び散った真っ赤な血。そして……………この世で愛した男の無惨な姿。四肢がいくつもの宝具で貫かれている。動きを鈍らせないために魔術で強化したのが両拳だけなのが仇となった。

「……………マス……………ター……………?」

小さく、小さく、誰も聞こえないほどの声でキャスターは呟いた。それは周りの木々が風でざわめきかき消されるほど小さな声。だが、それでも葛城宗一郎だけには聞こえた。聞こえないはずがない。こ

の男ならどれだけ離れていようと二人の間に壁が生じようともキヤスターの声だけは聞き逃さない。なのに答えない。いや、答えることができなかった。一つの剣が喉に突き刺さり、もはや声が出せる状態ではなかったのだ。でたらめに投擲されたため急所という急所には当たっていない。しかし、数が数なだけに出血多量による死はまのがれない。幸か不幸か、普通の人間ならこれだけの深手でシヨック死に陥ってしまうが、常人離れた肉体と精神力の持ち主であるこの男には意識を手離すことができなかった。

「――」

男は潰された喉に全ての神経を集中して一つの言葉を口にした。しかし、それは声というにはあまりにも歪で、本人自身聞き取ることができなかった。神経を喉に集中し過ぎていたためか、自分の体の異変によく気がついた。それは人間という名の“道具”として生まれたこの体に不必要なほど多くの穴ができたことでも、人間という名の“道具”を機能させるための血液が外に漏れていることでもない。頬を伝う血とはまた違った液体。知識では知っている。人間という名の“生き物”だけが用いり、自分のような“道具”にはなんら必要のない“涙”というもの。“道具”として生まれ、“道具”として育ち、そして“道具”としての用途を終えたこの体は中身のない残骸。初めから使い捨ての道具として自己を認めていたのだ。………というよりも諦めていた。自分が“生き物”ではなく“道具”だと諦めなければならなかった。道具であれば支障なくただ自分の為すべきことだけに集中できるから自分を否定し続けた。だが、この頬を伝う涙は葛城宗一郎という男にはあってはならないものだ。根源から否定し続けたこの男を唯一本当の人間だと証明づける物的証拠。自分は道具だという否定を真っ向から切り捨て肯定する要因。認めなければならぬ。自分は“道具”ではなく“生き物”なのだ。今まで生きてきた人生を否定しなければならぬの

だど。だが、それは男にとって悲しみではない。“道具”が“生き物”を愛してはいけなければ、その逆も然り。命があるものとないうものは決して結ばれない。それは世界のルールにないにせよ暗黙の掟として存在した。道具が生き物を愛するなどとんだ笑い話だ。だから、男は自分の感情を隠し続けてきた。自分にさえ気づかれないうように。

だが、男はようやく悟った。もう隠さなくていいのだと。否定しなくてもいいのだと。あの女を愛していると心の底から叫んで良いのだと。

そして、初めて男は神に誓った。

———できることならあの女を力強く抱き締めさせてくれ、と。

十　十　十

目の前で起きた出来事がよくわからなかった。

柳洞寺は強固な結界を何重にも張り、それこそ鼠一匹入れないほどの一切のすき間がない代物だ。何しろここ数ヶ月かけて作ったものだ。これならばあのバーサーカーですら容易に侵入することは出来ないほどだと自負していた。だが、堀の上に立つ黄金のサーヴァントは気づかれるどころか結界を壊さずに侵入してきた。そんなこと、アサシンですら不可能だ。

しかし、今はそんな奇跡染みたことではなく、目の前で起きた出来事が理解できなかった。

「―――マス……ター……………」

何を誓った？

――葛城宗一郎という男を守ることを

何のために誓った？

――葛城宗一郎という男と一緒に生きるために

なぜ、誓った？

――葛城宗一郎という男を深く、深く愛していたから

だが、目の前の惨状はなんだ？ 守ると誓った者を守れず、逆に守られるとはなんたる滑稽だろうか。このようなことは信じれない。目にしたこの光景を脳が受け付けない。

――だからだろう。心が苦しいくらいに狂ってしまいそうになるのは。だが、バーサーカーのように理性が壊れることはなかった。

「―――」

愛する男から返事が返って来たのだ。他の者が聞いても聞き取れない掠れた声。だが、葛城宗一郎という男がキャスターの小さな声を聞き逃さないように、キャスターもこの声を聞き逃すことはなかった。

——無事か?——

たったその一言でキャスターの理性は保たれた。サーヴァントである自分の前に立ち、宝具で貫かれ瀕死状態のくせになお他人の心配をするとは……………。

「全く、貴方って人は——」

——なんてバカな人。そう棘のあるの口調で言った。でも本心は違った。身を挺して守ってくれる、そんな人は生前にもいなかった。

だから嬉しかった。こんな汚れた自分を守ってくれる人がいることが。

だから一緒にいたかった。この幸せが長く続くように。

だから離れ離れにならないよう倒れる男を抱き締めようとした。それで二人は永遠に別れることはないと思ったから。

——だが、キャスターは忘れていた。きっとこの数ヶ月が心地よすぎて頭の中からなくなっていたのだろう。

——この世界は常に残酷にできていることを——

キャスターが抱き締める寸前、新たに放てられた一つの剣が男の胸に飛来し、腰から上がこっぱ微塵に碎かれた。消失したものを抱き締めることができるはずもなく、キャスターの腕は空を切った。腰

から下はキャスターに当たることなく横に倒れ、その周りには飛び散った血肉だけが残った。

「いや、いや……………イヤー!!」

偶然手の中に入ってきた男の肉片。血でまみれ、赤く染まったそれは、人としての役目を終えた道具の破片。背けたかったはずの現実を目の当たりにし、キャスターに葛城宗一郎を救う手段は完全に絶たれた。

「……………」

全ての希望を失ったキャスターは膝をつき、何かを捜すかのように地面を見回した。そして運よく見つけることができたのか、血肉を掻き分け赤く染まった何かを手にとった。それは魔術付加もされていないためにもとの眼鏡の原型を留めていない金属片。キャスター自身、こんなものに特別な思い入れなどない。だけどこれしかなかったから。これだけは大事にとっておこうと思った。

「ククク、不様だな。いや、貴様は道化なのだから地に這いつくばる姿こそがふさわしい」

その姿を黄金のサーヴァントはまるでこの光景が喜劇であるかのように笑い見下ろした。

「しかし、見誤ったな。あれほど簡単に壊れるとは。あと二つ三つはいけると思ったのだが。雑種は雑種なりにこの我を楽しませろと言うに」

項垂れるキャスターを見て黄金のサーヴァントは高く笑う。このサ

ーヴァントからしてみればこの状況は喜劇のようではなく喜劇そのものである。

そして、その言葉にキャスターの目に光が宿った。黒い、黒い光が。一つだけしなければならぬことが残っている。愛する者を殺した者に相応の罰を与える。殺した者を殺したところで殺された者は戻って来ない。それはキャスター自身わかっている。だが、しなければならぬ。この黄金のサーヴァントを殺す以外もう自分には何も残ってはいないのだから。

「貴様アアアー!!」

キャスターの周りには十を超える魔法陣の数々。一つ一つに込められた魔力が先ほどセイバー達と戦っていた時とは段違いである。

「力の差も見極めれんとは何と愚かな。だが許してやろう。もとより道化とは愚者から成り立つもの。この我との力量の差を読み取ることなど到底できんだろうからな」

黄金のサーヴァントの周りにはキャスターの魔法陣の数を超える二十の宝具。それぞれ放てられた魔術に一人でに発射されことごとくを撃ち破った。それも衝突しても勢いは止まる事なく全てがキャスターを襲った。

「————ガッ!!」

二十の宝具が突き刺さったキャスターは糸が切れた人形のように倒れかける。もとよりキャスターとして喚ばれたこの体は肉体面が非常にもろい。

だがキャスターはひれ伏すことはなかった。確かに肉体面では他のサーヴァントと比べて最弱。これだけの攻撃をまともにくらえば必死は免れない。それでも倒れず立っているのは唯一の希望をズタズタに引き裂いた黄金のサーヴァントへの殺意と葛城宗一郎という男に抱いた愛だけだろう。

「道化が……。立っている貴様など見るに耐えん。さっさと消え失せろ」

瀕死の状態であるキャスターにとどめの一撃と言わんばかりの投擲。慈悲か、それとも本当に早く殺したかったのかはわからないが自らの手で放った一撃は見事にキャスターの心臓を捉えた。

「……………そう、……………いち……………ろう……………さま……………」

最後にもがくようにあの男がいた場所に手を伸ばす。もうそこには誰もいないというのに。

こうして初めて希った男の願いもキャスターの夢も無惨に散っていった。

（後書き）

最後まで読んでくれた方に感謝です。本当は最初から最後まで書きたいのですが、他の作品も書いてるし、私を書いたらだんだん原作レイプになってしまうので書かないで過ごそうと思います。また、『願いの先に』もよろしくお願いします。以上、春ノ風でした（これよかったのかな？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0133i/>

果てのない夢

2010年10月14日21時24分発行